

ハプスブルク家異聞(その二)

トルコ襲来

——第一次・第二次ヴィーン攻防戦——

幅 健 志

たちこめる血の匂と膨れあがる暗い予感におののき、
 またしても妖婆の手許にたぐり寄せられたマクベスは、
 そこでおのが行末を告知する怨霊の声を聞く。「マクベ
 スは滅びはしない、あのバーナムの大森林がダンシネイ
 ンの丘に攻め登って来ぬかぎりは」、冥界から立ちのぼ
 る声は、こう王位篡奪者にささやきかける。奈落へと突
 き進む自分の姿を見据えながらも、シェークスピアの悲
 劇の主人公は、謎めいた予言を此の世に起こりえぬ不条
 理、おのが盛運の証として、必死にうけとろうとするの
 だ。だが反撃を開始した敵勢は枝木で擬装しながら、マ

クベスのたてこもるダンシネインの城に向かってじわじ
 わと押し寄せて来る。「森が動きだした」という部下の
 悲鳴に、さしもの猛将も最後の時が迫りつつあるのを悟
 らざるを得ない。
 朝の礼拝をうながすアザインの声が、澄み切った初秋
 の冷気をふるわせてトルコ軍宿営地に響きわたる。一瞬
 宿営を満たしていたざわめきが遠のく。やがて南東にむ
 かって額づくイスラムの戦士たちの間から、アラアの御
 名が海鳴りのようにわきあがってきた。そして、トルコ
 軍陣地が再び朝の活気を取りもどした頃、メッカとはち

ようど逆、北西の方向に横たわるカーレンベルク連山の頂が、突如「雷雲」に包まれたかのように黒ずむのを、オスマンの將兵達は目撃した。朝日をうけてくつきりと浮かびあがっていた山々の峰に、はじめ一点の染みとみえた塊は、みるまに数を増し、稜線を走り、山頂を黒々と塗りつぶしたかと思うや、今度は「瀝青炭」の如く山腹をつたい始めたのだった。

シェークスピアのマクベスが見たのは森が動く光景、だがヴィーン攻囲中のトルコ軍総大将カラ・ムスタファを驚かせたのは、「立ち向うものを押し潰し、焼き払いながら」流れ下る「瀝青炭」であり、刻一刻とずりむけてゆくカーレンベルクの山膚である。この西暦一六八三年九月十二日払暁、カーレンベルクの山頂に集結した救援軍は、ヴィーン包囲のトルコ軍団に決戦を挑むべく、山麓へとくりだし始めたのである。

大宰相カラ・ムスタファの率いるトルコ大軍団が、ヴィーンをすっぽりと包囲して以来、すでに六十二日目、

破局の様相を強めつつあった町は、唯一の望みをこの友軍に託して、長く困難な籠城戦を耐え抜いてきた。救援軍編成の作業は、敵勢ヴィーン席捲の報にも遅々として進まず、ようやく帝国内でかき集めた兵力は、わずか二万八千。神聖ローマ皇帝レオポルト一世の走らせた急使にもドイツ諸侯の反応は鈍く、ヴィーン陥落の危険も、自国の権益擁護に汲々の帝国諸侯にとっては、よそごとにはすぎない。三十年戦争の残した傷あとは大きく、かつての神聖ローマ皇帝も、今では一介の王にすぎず、帝冠も帝笏も現実の力とは無縁の豪華な飾りと化している。しかもドイツ新教派諸侯は、ハプスブルク家の旧教護持の強硬路線に強く反撥していたから、キリスト教国の存亡を説く皇帝親書に、冷やかに応じたのも無理はない。尻に火のついたレオポルトだったが、さすがにルイ十四世への特使派遣はみあわせる。王はキリスト教世界の帝王をも自認する手前、異教徒軍とのヴィーン挟撃作戦だけは控えてくれたものの、「両者の「不神聖同盟」は公然

の秘密だった。フランス宮廷はことあるごとに西征をトルコに使喚し、近隣諸国には金と銃剣をちらつかせながら、アメとムチとで親ハプスブルク戦線の結成を牽制しつづけてきた。仇敵の王城の地・ヴィーン凋落こそ、太陽王にとっては願ってもない僥倖、法王の説得がなかったなら、ライン左岸などといわず、異教徒軍と呼応し、ヴィーンはさみうちの挙にでたいほど。

ドイツ諸侯の興心はなによりも大国フランスの出方にあったから、ブランデンブルク大選帝侯は、ついに一兵も送らずじまい。ハノーファー公は申し訳にもならぬ数百の騎兵を差し出しただけで、結局ドイツ帝国諸侯のうち、バイエルンとザクセン両選帝侯がそれぞれ九千と一万一千、フランケンとシュヴァーベンが八千の兵員を派遣してくれたにとどまる。一方、ドイツ諸侯の不誠実な対応とはちがひ、ポーランド王ヤン・ソビエツキは二万四千の軍隊を従えながら、クラクフよりオーストリアめざして南下。スルターン・メフメト四世（在位一六四八

一八七）が巨大な軍勢を率い、アドリアノーブルから北西に向かった丁度同じ三月三十一日、皇帝レオポルトとポーランド王との間に同盟が成立していたのだった。クラクフ、ヴィーンいずれかがトルコ軍の攻撃を受けた場合、相互に援軍を派遣しあおうとの協定である。これまでたびたびオスマンの侵攻にさらされてきたポーランドは、不隠な動きを見せはじめた宿敵に、ルイ十四世の期待をうらぎり、ハプスブルク家と手を結ぶ。この背後には、「十字軍法王」とも呼ばれ、対トルコ戦のためにヴァチカンの冗費を削り、ケチに徹したイノセント十一世の熱意と、三〇万グルデンという法王庁からの支度金提供の事実が控えている。

男のなかの男として全ヨーロッパの称賛を一身に集めることになるこの武将も、ただ義侠心からおっとり刀で男の約束をはたしにかけつけたのではない。トルコ軍団がヴィーン包囲の陣をはり、その矛先が自国に向けられていないのをしかと見届けたうえ、やっこのことで肥満

ぎみの巨体を持ちあげてくれたのだった。八月の末、オーストリア国境をこえたソビエツキは、ドナウ北岸の地で皇帝軍総司令官カール・フォン・ロートリンゲン公と会合。出自ではともかく、片方はまがりなりにも王だったから救援軍の総指揮権は異国の武將に渡された。

同盟軍総大将の軍配を手に大満悦の王は、ロートリンゲン公の作戦計画をそのままあっさり了解。公の腹案とは、包囲された町の西側に広がるヴィーナー・ヴァルト山系にわけいり、町を望むカーレンベルク連山の峰々から、オスマン軍団に戦いを仕掛けようとする大胆なものだった。同盟軍の集結地はヴィーン西北のドナウ河畔の町トゥルン。ポーランド軍と二万一千のオーストリア軍は、ともにドナウ左岸を進み、トゥルンの近くで中洲を利用しながら渡河する。折からの増水で、舟を繋留しての架橋作業は困難をきわめ、さらに河岸や中洲をおおう湿地帯の徒渉も容易ではなかった。しかし予定どおり、九月八日、この軍団はすでにボヘミア、パッサオ経



1686年頃のヴィーン

由で到着していたドイツ諸侯派遣部隊と合流し、ここに
 ヴィーン救援軍は騎兵四万二千、歩兵二万三千、大砲一
 五〇門の戦力となる。

不充分とはいえ一応兵員と輜重の調達は出来たが、何
 分ともそれぞれにアクの強い指揮官に率いられた寄せ集
 め軍団。問題はこの烏合の集団から、共通の目標に一団
 となって驀進する激しい戦意を引き出すことであろう。

この課題をみごとに果たしたのが、イタリア生れのマル
 コ・ダビアーノというカプチン派の僧である。説教師と
 してとみに名が高かったこの僧は、数年前にたまたま踏
 みいったオーストリアの地で皇帝の面識を得、それ以来
 宮廷の絶大なる信頼を獲得していた。ダビアーノはトゥ
 ルンの軍営において、また巷説ではカーレンベルクの山
 上でも、陣中ミサを挙行し、激烈かつ厳粛な説教と祝福
 で将兵達を呪縛してしまう。それもイタリア語とラテン
 語であったというから、加持祈禱師に近い演出術を存分
 に心得ていたらしい。ここに、宗派上の対立を背負った

ままで会合した将兵は異教徒に対する聖戦意識をたたき
 こまれ、ミサの感動は激しく燃えたぎる戦意へと転化し
 ていった。助祭役をみずから演じたポーランド王を筆頭
 に、功名心にはやり鬨争心旺盛な猛将たちも、ひとしく
 精神的高揚を覚え、感激にむせぶ。もっともカプチン派
 きつての弁士にとって、出陣前の異常な興奮状態にある
 兵士たちや、異教徒討伐に馳せ参ずる直情径行型の武人
 の籠絡など、赤子の手をひねるようなものであったらう
 か。ともかく宗教的情熱に加え、政治的見識も高く、し
 かも人情の機微にも通じていたこのカプチン僧は、いつ
 なども戦列放棄の行動に走るか知れたものでない烏合
 の集団に、ひとつの指針を与え、ヴィーン奪回の軍事
 行動を、法王の名において「十字軍」に作りかえたので
 ある。また一説によると、トルコ軍接近の報にあわてて
 ヴィーンを逃げだした手前、なんとか汚名挽回をはかる
 うと、パッサオからデュルンシュタインまでにじり寄っ
 てきたレオポルト帝に、ヴィーン解放の時まで、そこに

とどまるよう説得したのもダビアーノその人だったという。彼は指揮権をめぐる皇帝と王との確執を懸念、いまやポーランド兵なき同盟軍は考えられない状況だったから、まずはやる気満々の王の面子をたてるが肝要と皇帝を折伏したのである。

九月九日の早朝、救援軍は各軍団ごとに次々とトゥルンを進発して行く。最後の集結地点カーレンベルクの山稜まで、三日間の行軍。直線距離にしてわずか二〇数キロの行程なのだが、うち二日間は谷川を伝い、尾根を越え、灌木を切り払っての前進で、重装備のうえ山道に弱い馬をつれた騎兵や、大砲をひきずる砲兵には文字通り強行軍となった。先発の小部隊がレオポルトベルク山頂の敵軍前哨基地に夜襲をかけ、トルコ軍に破壊されていたカーレンベルクの僧院をも制圧し、本隊到着の地ならしをする。すでに敵勢接近の情報を入手していたカラ・ムスタファではあるが、山上の戦略的な意味をかるく見ていたようで、守備はまったくの手薄だった。

多数の騎兵を擁するポーランド軍は、半日行程ほど遅れていたものの、総攻撃前日の午後には、ヤン王、ローリンゲン公、マクス・エマヌエル・フォン・バイエルン、ヨハン・ゲオルク・フォン・ザクセン、ヴァルデク侯ら各指揮官が、レオポルトベルクの山上からヴァイン盆地を見はるかしていた。

眼下を流れ下るドナウは、ゆったりしたうねりを見せて川幅を広げ、いくつもの島を浮かべながら、遙か東の方に白い帯となって消えている。遠目にも、焼き払われた中洲の町レオポルトシュタット、異様な高さを誇る聖シュテファン寺院、硝煙たなびく戦闘地帯、広大な敵軍陣地とそこに林立する無数の天幕が実に鮮やかだった。さらにカーレンベルクの山裾・ヌスドルフまで進出し、対同盟軍用の新たな陣地を構築している敵勢の姿も一同の視界にあった。

遠方の地からはるばるやって来た武将たちは、トゥルンでの軍評定の説明とひどく違う地形に驚く。最後の峰

をのぼりつめれば、その先はなだらかな山腹とヴィーン盆地の沃野が出現するはずであった。確かに眼前にはヴィーン盆地が横たわっている。だが、ドナウ右岸に屹立するレオポルトベルクに始まり、カーレンベルク、フォーゲルザング、ヘルマンスコーゲル、ドライマルクシュタインと続く、当時ひっくるめてカーレンベルクと呼ばれていた山々は、それぞれにかなりの起伏を持つ小尾根を従え、丘陵をつくり、しかもクロッテンバッハ、アルスパツハなど幾筋もの谷川に大地は深く削りとられ、地形は単純な絵図面では示しようもない複雑さを見せていたのだ。一気呵成に山腹を押しだし、敵陣におどりこもうと考えていた武将らは、この複雑な地形を前にして大々的な兵の展開、とりわけ騎兵と砲兵隊の機動力は、きわめて制限されたものにならざるを得ないとの思いを深めたという。しかし、先の軍議で決定された配陣は変更されなかった。計画が完璧だったというより、陥落寸前の町を眼の前にして、最早一か八かの勝負に出ることし

かなかったのだ。客観的にみても、総攻撃前日の時点で、まったく勝敗の帰趨は決定しがたく、すべては時の運に委ねられた感が深い。



七月七日夜八時、皇帝一家はあわただしく馬車に乗りこみ、ヴィーンの市門をあとにした。重臣から召使いに至るまで、先を争うようにしてこの後に続き、貴族、豪商など上流階級はむろんのこと、多くの市民も、この災危に見舞われようとしている町から逃げだし始めた。

カール・フォン・ロートリンゲン公麾下の皇帝軍に期待し、これまで鷹揚にかまえていたヴィーン宮廷ではあったが、この日の午後とびこんできた凶報に度を失ってしまう。市門を一気にかけぬけ、激しく馬蹄をひびかせながら宮殿に乗りつけた騎士が、ヴィーンとは指呼の間にあるペトロネルで皇帝軍が敗走させられたとの報をも

たらしたのである。当初ハプスブルク領ハンガリーのラープ城砦に、主力部隊を集結していたロートリンゲン公は、敵軍が一直線にヴィーンに向かう恐れが出てきたため、ハンガリーの副王エステルハージーの軍に砦をまかせ、兵をヴィーンへと移動させつつあった。延びきった戦列でラープから帝都へと向かう騎兵と輜重隊の一角に突如襲いかかったのは、敵の前衛タタールの騎馬隊である。トルコ軍がまだハンガリーの地にいると考えていたオーストリア将兵は、早くもライタ河畔に出没した敵軍団に大混乱。タタール騎馬隊はあっけなく撃退されたのだが、ふってわいたような敵勢の出現に虚をつかれた恰好で、混練し膨れあがった情報が宮殿に達してしまったのである。

ヴィーン市民の鋭い嗅覚は、数ヶ月前から宮殿のそれとない動きを察知していた。馬車が密かに狩りあつめられ、宝物類や重要書類が梱包され、いづこともなく運び出されているらしい。ハンガリーから逃げてきた者達の

話も伝わりはじめ、イエズス会の僧侶達はあわただしく僧院を出入りし、常日頃の自信にみちた態度はどこへやら、表情をこわばらせ、教団内部には大きな動揺が広がっているらしかった。しかしレオポルト帝の義理の母エレオノーレ皇太后が、郊外のファボリート離宮から宮殿内に引越してきたこと以外に、別段これといった動きは見られず、皇帝は相変わらず大勢の伴まわりをつれ、ヴィナー・ヴァルトで大好きな狩猟に興じていた。

このハプスブルク家の当主、神聖ローマ皇帝レオポルト一世は、ヴィーンを「黄金のリング」と紹介したトルコ版「西欧見聞録」の作者チェルチスによって、「ラクダの如き分厚い唇」をもつと書き留められるほど、見事にハプスブルク家伝来の身体的特徴をみせていた人物。イスラムの旅行家は、もちろん邪教の首長をことさら醜悪に誇張しているのだが、帝の肖像画はたしかにずばぬけて大きい口と豊かにめくれた唇を示していて、「涎のたれ流し」とまでゆかないまでも、かなりアゴの締まり

は悪かったのであろう。容貌は醜いといえば醜いが、神聖ローマ皇帝にして名門ハプスブルク家の当主だと思えば、造作の不気味さは神秘的な威厳、あたりを払う気品ともなつて臣下を威服させたものと想像される。兄弟の早世にイエズス派僧院学校からつれもどされたレオポルトは、宗教問題では芯のつよさを發揮したが、「善良者」と称されるだけあつて、その他の面では万事につけ優柔不断で涙もろく、しかも音楽をこよなく愛好するという、民衆側からすればまずまず無難なタイプの統治者だったといえようか。この有難い御方が町の中心に鎮座されておられるといった事実こそが、続々と流れこむ恐ろしい情報にもかかわらずヴィーン市民が冷静さを保てた何よりの原因だった。市民はひとしく自分達が皇帝の御膝元、ありがたい庇護のもとにあると安心しきっていたのである。

ところが、この日急遽召集された廷室会議は、宮廷のヴィーン脱出を決定。宮殿中が蜂の巣をつついたような

騒ぎになり、それはすぐさま市中にも波及し、「何をもつて逃げればよいのやら、何をすればよいのやら」と町中が恐慌状態におちいってしまう。はじめレオポルト帝は町にとどまりたいとの意向をもらしたという。しかし丁度妃は身重の上に、宮廷のかかえる膨大な要員はまさしく役立ずの典型であることを知らないレオポルトではなかったから、涙ながらにヴィーン市長と残留組の廷臣に後事を託して、宮殿をあとにしたのだった。警固兵に守られながら、ごった返す市中をぬけ、ローテントゥルム門に向う皇帝一行の馬車に、市民は「陛下、町にとどまって下さい、私共を見捨てないで下さいまし」と、哀訴の声をあびせる。皇帝の乗った馬車を先頭にして、脱出組の面々はドナウ橋をこえ、レオポルトシュタットをぬけ、更に四つの橋をわたって北岸の地へと落ちのびていった。真夜中まで、物すごい数の馬車と荷車と人の群れがドナウの彼方に消えていったが、後世の歴史家は最高六万名と、この数字をはじきだしている。

皇帝の馬車は、その夜のうちにコルノイブルクまでゆき、さらにメルク、リンツを経て、天然の要害・パッサウでやっと安堵の息をつく。現代風にいえばパッサウに教領にヴィーン亡命政府が樹立されたわけだ。ヴィーン市中では敵前逃亡をはかろうとする皇帝に対しても、さほど風当たりはきつくなかったものの、都を離れた地方ではそうはいかない。暴徒化した農民が、皇帝と随行の聖職者らに怨嗟の声をあげ、ハンガリーでの新教弾圧の報いがきたのだと怒号する。

家屋敷や商品や家財道具など、財産の大方を残さねばならなかったにしろ、ともかくも逃げられた者達は、まだ恵まれていたといえようか。積み残された者達は、市政の責任者たちと冒険心や野次馬根性から居残ったわずかの偏屈者を除いては、まさしく見捨てられ恐怖におののく人群れだった。この絶望の集団に加えて、近在近郊の住民が着のみ着のまま市壁の中に避難所を求め、退去命令が出された郊外の町民も、家財道具を車や背中にく

くりつけ、羊・鶏・犬・牛・豚をひきつれながら市内に流れ込む。脱出と流入の混乱の中で、この夜、町の秩序は崩壊寸前であった。

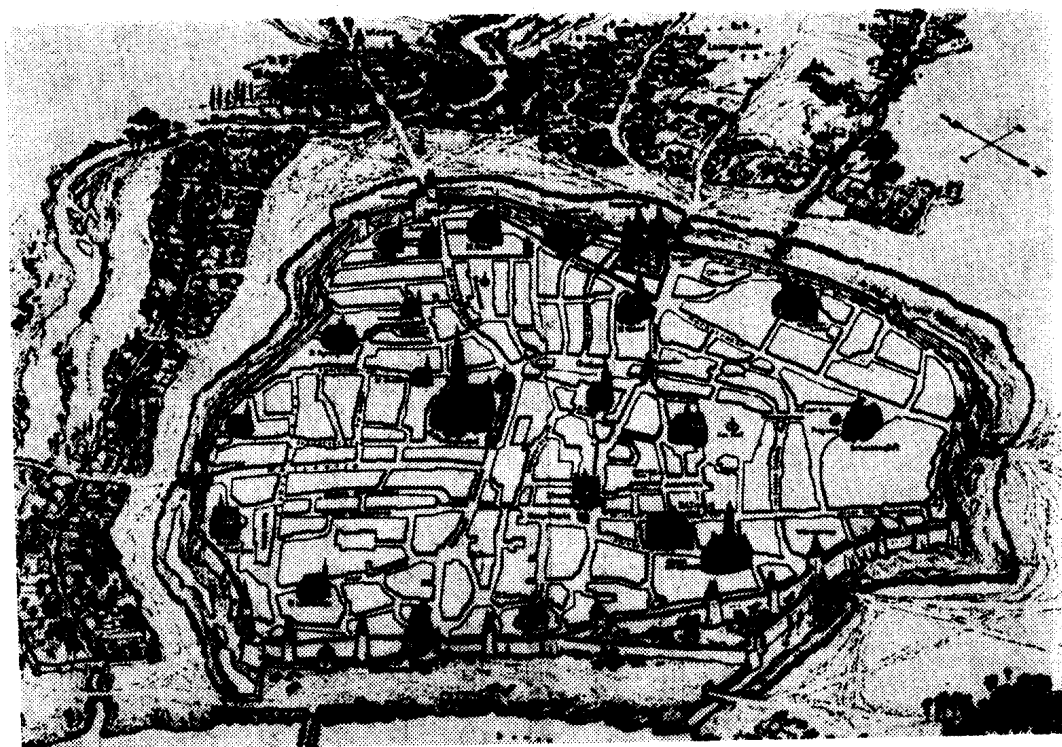
ところが、狂乱の一夜が明けたとき、町は不思議なほどに落ち着きを取り戻していたという。興奮のあとに忍びよる虚脱感だったのか、それとも逃れ得ぬ運命に腹をくくった者の凶太さだったのか。いや、去るべくして去っていった脱出組を見送ったあと、残された者達は身の不運を呪ってばかりはいられなかった。災危は目前に迫っている。市当局は居残り組の廷臣や軍の支援を受けて、籠城戦のための措置を矢つぎばやにうち出し、市民総動員態勢をととのえはじめたのだ。

※ ※ ※

一六八三年のヴィーン攻防戦からさかのぼること一五〇年余り、この町はやはりオスマン・トルコの攻撃にさ

らされている。一五二九年、オスマン帝国史上最大の版図をきずきあげたシュレイマーン大帝その人が、市壁の前に勇姿をあらわし、大天幕の壮麗な御座所がヴィーン郊外に設営され、総勢十二万もの大軍団がちょうどドナウ川を弦にした弓形の配陣で、町を押しつつんだのだった。

ぴったりと市門を閉じ、徹底抗戦の構えで大帝軍に歯向う意気盛んなヴィーンではあったが、頼みとするのは十三世紀中葉に形を整えた全長四・五キロの環状市壁。聖シュテファン寺院を核に家並みを密集させた市街は、王宮と大学、市庁舎と市場、それに多くの教会を擁する典型的な中世城郭都市である。市壁には十八の望楼がそびえ、ケルンテンとローテントゥルム門だけは、城門形式の比較的堅固な構造を見せていたが、残りは物見櫓程度のつくりだった。頭頂部に凹凸の頂銃眼が施された市壁の高さは六メートル前後、幅は狭いところで一メートル、厚い部分でもせいぜい二メートル。高さはまあまあ



15世紀後半頃のヴィーン

といえたが、何分とも厚みがない。このため内壁や頭頂部に木組みの足場や張出しがつけられ、防御力を補強する工夫がなされていた。弓・矢・鉄砲などの時代には通用したが、性能は大した事はないとはいえ、大砲の登場をみていた十五世紀、中世様式の防壁では十分に機能が發揮できない。町が擁する百門余りの大砲も、市壁上に据えつけるのは無理で、別に櫓を組んだり、家屋の上階部に台座を設けるなどの応急策がとられる。市壁の外側にめぐらされた環濠部分、いわゆるグラীবーンには市壁の土台を保護するためか水は引きこまれておらず、雑草が生い繁り、なかには市民の手頃なゴミ捨て場と化し、埋もれてしまった個所も見受けられたという。後年このグラীবーンの外側にはグラスと呼ばれる広大な空き地、軍事的見地からの無人地帯が出現するのだが、この頃はまだ郊外の家並みが環濠のすぐ際まで迫っていた。トルコ勢接近の報に、町はこの郭外市にみずから火を放ち、焦土作戦に踏み切ったものの完全な破壊には至らず、敵

側は焼け残りの家屋や塀を楯にしながら、市壁にとりつこうと襲撃をくり返す。市壁の外側に散在する郭外市も一応、レンガや石や柵などで作られた防御設備を持つてはいたが、もちろんこの程度の規模ではいくら補強したところで、本格的な戦闘には役立つはずもない。またケルンテン、シュトゥーベン、ショテンの各市門から郊外にのびていく街道には、郭外市の城門をも兼ねた形で、たとえばケルンテン街道を見張るラスラ塔といったように、かなり頑丈な建造物も見られたが、圧倒的な戦力を誇る敵軍にかかってはとうしようもなく、前哨戦であっけなく放棄されてしまう。

第一次ヴィーン攻防戦は西暦一五二九年、大宰相にして副大将のイブラヒムが、第一陣を率いて現われた九月二十五日の午後に始まる。早朝に火をかけられた郊外の八百戸は、まだ盛んに焰を吹きあげ、黒煙がヴィーンの町を包みこんでいた。翌二十六日大帝が乗りこみ、半月形の布陣で町を包囲。さらにドナウ川を溯航してきたト

ルコ水軍は対岸への橋をすべて焼き払い、町を完全に外部と遮断した。包囲作戦を完了した大宰相は、ケルンテン門周辺に主力を投入し、砲撃と坑道作戦で市壁突破をはかろうとする。

これを迎え撃つヴィーン防衛軍は、フェルディナント・オーストリア大公の軍司令官サルム・ツィ・ニクラス伯に率いられた傭兵一万二千と八千の市民軍である。多くの市民が逃げだして行ったが、市壁内にたてこもった者達は援軍の到来を信じて奮戦する。先制攻撃を試み、市門から敵陣地めがけて出撃し、押し寄せる敵勢には、これを食いとめるべく必死の防戦。包囲網をしかれてから二週間余り、ヴィーンは幾度かの危機を切りぬけてきたものの、坑道をうがち、爆薬をしかけての執拗な攻撃に、ケルンテン門は崩壊寸前、附近の市壁も大きく崩れおち、木材や瓦礫や土のうで何とか敵の侵入をくい止めるといふ惨状。

十月十四日、包囲十九日目、トルコ軍大本営は総攻撃

の体勢を整えた。これまで御座所から部下の戦いぶりをゆっくりと賞味し、ヴィーン開城を泰然と待ちかまえていたかに見えるシュレイマーン大帝も、金銀財宝のうなる邪教徒の町にとどめをさすべく、城壁一番乗りの者に莫大な恩賞を約し、近衛兵イエニチェリには特別手当を提示して奮起を促す。だがヴィーン側の必死の防戦に、二度にわたる突撃を試みたものの市壁突破はならない。その日の夕刻、にわかにはトルコ軍陣営があわただしく動きはじめた。敵軍の手中にあった郭外市に再び火の手があたり、斬殺される捕虜達の絶叫が宿营地に響きわたる。トルコ軍恒例の撤収作業である。総攻撃の不首尾にアラの神はこの町を望み給わずと、大帝は潔きよく兵引きあげの決断を下したのだった。聖シュテファン寺院に半月旗はひるがえらなかつたものの、翌朝シュレイマーンは、大宰相イブラヒム以下各イエニチェリに至るまで気前よく褒賞を与え、整然ともと来た道を引き返していった。

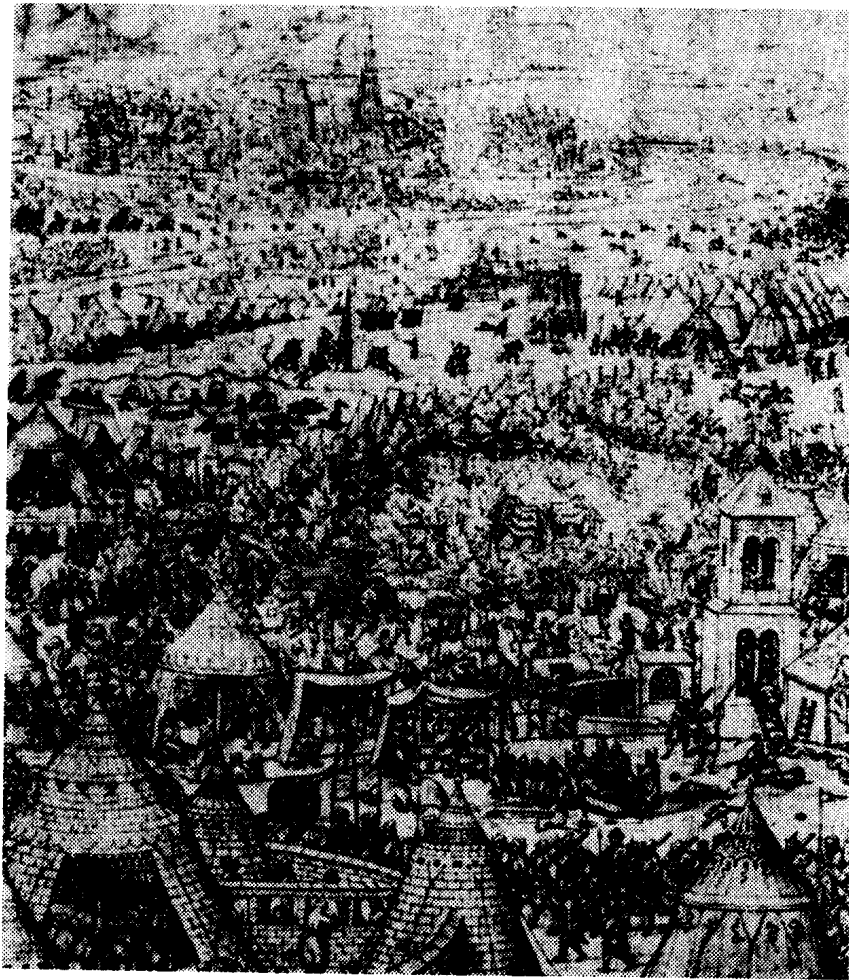
シュレイマーン大帝の解釈とは全く逆に、ヴィーン防衛軍にとってまさしく神の加護ともうつつた、この突然のトルコ軍総退却を専門家は様々に分析するが、そのひとつに大帝は救援軍を過大に評価しすぎたという説がある。風雲急を告げるなか、時のオーストリア大公フェルディナントは、兄の神聖ローマ皇帝カール五世に援軍派遣を求め、ボヘミア王としてプラハ、メーレンに派兵を要請し、オーストリア各地を駆けずりまわり、更にドイツ諸侯にも協力を求めるなど必死の工作をしていた。しかし頼みとする兄は、フランス、イタリア問題で手一杯、ドイツ諸侯はカトリック派のハプスブルク家を警戒し、ようやく新教徒側の手かせ足かせの条件付で編成された救援軍は兵力わずか一万。しかもライン宮中伯フリードリヒを司令官とするこの帝国派遣部隊は、クレムスまで来たものなかなか腰をあげず、ようやく動いてくれたのはいいが対岸のビザンベルク止り。橋が焼失しているというのが理由であった。ただ本隊と別れて包囲寸

前に、数百の騎兵を率いて市門にかけこんでくれた宮中伯の甥フィリップだけは、ヴィーン司令官サルム伯の片腕として貴重な戦力を提供。具体的には何ひとつしてくれなかった帝国派遣軍だったが、ドナウ川の向う岸とはいえ、つい目と鼻の先に、それも動いてくれればまだしも、奇妙に鳴りをひそめたままの敵軍は何としても無気味である。フェルディナント大公が救援軍編成のため奮闘中で、市中にいないことをシュレイマーンは知っていたから、対岸の敵軍は大公の増援部隊を待っているのだと考えたところで無理はない。

さらにシュレイマーン大帝がみせたあつけにとられるほどの水際だった撤兵は、この一五二九年の、異常に早い冬將軍の到来にあったと説く史家は多い。親征軍がイスタンブールを発したのは五月初旬、ブタ攻略が九月八日、グラン、コマロン、ラープは抵抗も見せず大帝の軍門に下り、下オーストリアの町、ハインブルク、ブルック・アン・デア・ライタ、トラオスマンスドルフなども

次々に帰順という快進撃だったが、ヴィーンは予想外のしぶとさを見せ、短期決戦どころか、包囲戦はするずると十月中旬までも長びいてしまう。結局は五月出陣とい

う遠征の出遅れが指摘されようが、それにしてもこの年の天候は不順で、雨が多かったうえに、十月中旬には、早くも真冬並みの寒波が襲いかかってきたらしい。事実



第一次ヴィーン攻防戦

トルコ側の遠征記録には、撤退の第一夜、ブルック・アン・デア・ライタの町で雪に見舞われたとの記載があるという。

またトルコ史関係の専門家は、オスマン帝国軍の中核部隊・イエニチエリの変質と腐敗の徴候を、早くもこの第一次ヴィーン遠征軍にみている。勇猛果敢な戦士として、盛名をさせたスルトアン直属の中央常備軍・イエニチエリ軍団は、十四世紀の中葉、オスマンの領土拡大に伴う軍制改革で生まれた「新軍」^{イエニチエリ}である。この近衛軍団は歩兵を主体に、騎兵、後には砲兵をも擁するスルトアンの主力部隊に成長。遊牧民たるトルコ族は、馬の扱いこそお手のものだったが、歩兵には不向き、それならいっそ、ギリシヤ、アルバニアなどトルコ領ヨーロッパから男

児を徴発し、歩兵隊を作りあげようとの発想だった。数年毎に徴発吏がバルカンの地に現われ、教会戸籍簿を手に、八歳から十四歳までの男の子を検分し、優秀な人材を首都イスタンブールに連れてゆく。少年達はスルターンの宮殿や後宮、一般トルコ人家庭などでイスラム教徒として養育された後、軍学校におくられ、肉体の鍛練と武技の修得に専念させられた。頭脳、体力ともに秀でた若者は、皇帝付き小姓から側近となり、高官として国政にも参与、大多数の者たちはイエニチェリとして歩兵隊に、スパールヒとして騎兵隊に配属されたのである。

厳しい軍律に耐え、アラアの戦士として狂信的な闘争心を見せる精鋭軍団は、創設後約八十年間は十分にトルコ宮廷の期待にこたえた。ここにスルターンの絶対的權威と厳格な軍規を物語る挿話がある。ひとりのイエニチェリが味方の壊滅を、敵陣突破の決死行の末、スルターンのもとに告げた。主じきじきこの兵を引見したのち、褒美を待ちうける男になんと斬首の刑を申しわたしたと

いう。敵前逃亡の罪名であった。しかし巨大武装集団のごく自然のなりゆき、やがてみずからの力を自覚し始めた軍団はスルターンの手向い、反抗し、あげくのはてはその首をもすげかえる狂暴性を見せはじめた。

第一次ヴィーン攻防戦に関するオーストリア側の文書には、部下にむかって抜刀し、ムチを振りあげる隊長・アガや、それでも突撃をしぶるイスラム将兵の姿がとどめられる。またブタ攻略の際に持ちあがったイエニチェリの暴走事件は、まさしく大帝没後、次第に深刻化してゆくエリート軍団頽廢の兆だった。ブタ攻略の折、大帝は敵側守備隊の戦いぶりに感服し、開城に应ずれば将兵の命と町の安全を保証するとしたのだが、略奪禁止の処置に激怒したイエニチェリ軍団は、降服した敵に斬りかかり、ブタの町をも徹底的に荒しまわる。掠奪物の重みは戦意を消失させたばかりでなく、大帝と近衛軍団の間にも、ヴィーンまで持ちこまれてゆく抜き差しならぬ対立が生じてしまったのだった。

※ ※ ※

一五二九年、一六八三年と前後二度にわたるオスマン軍団のヴィーン遠征は、ともにハンガリー問題が直接的な引き金となっていた。ハプスブルク家と民族主義を標榜するハンガリー土着勢力との抗争に、トルコが介入してくるといふ基本構図である。

十六世紀、英主シュレイマーン大帝のもとで全盛期を迎えたオスマン・トルコ帝国は、東欧に向け本格的な西進を開始。二一年ベオグラードを攻略、二六年にはハンガリー王国に襲いかかってゆく。第一次ヴィーン攻防戦の三年前である。ときのハンガリー王はルドヴィック二世、ハンガリー名でラヨシュと呼ばれる二十歳の青年王であった。ハンガリー史上最大の勢威を誇ったマーチャー・コルヴィーン王亡きあと、貴族らはまたまた国王選挙権なる伝家の宝刀を引きぬいて、ポーランドはヤゲロ家から主を迎え入れたが、これが青年王の父ウラー

スロー二世（在位一四九〇—一五一六）。父親はボヘミア王でもあったが、選挙王のハンディに加え、マジャール貴族は不租権に象徴されるような途轍もない特権を振りかざしてくるのだから、王権強化の政策など打ちだせたものではない。息子の時代も同様、大マグナートのヤノーシュ・サポイヤが民族派を牛耳り、諸勢力が各地に跋扈し、王国とは名ばかり、国王の権威など無きにひとしい。

ラヨシュ王は国境の町ペトロヴァラデン陥落の報に、対トルコ戦を呼びかけるが、国内は分裂状態で、未曾有の国難を前にしても臨戦態勢が組めない。王妃の長兄、神聖ローマ皇帝カール五世は、フランスとの抗争に忙しく、つい数年前にオーストリアに乗り込んできたばかりのフェルディナント大公にしても、新しい領国支配に手こずり、妃の弟君ラヨシュと妹のハンガリー王妃が待ち望む援軍どころの話ではない。軍資金もなく、兵もなく義兄・義弟からの支援もなく、国内の統一戦線も組めな

いという八方塞がりの状態ではあったが、振りかかる火の粉に、青年王は戦いを受けてたたざるを得ない。ラヨシュはみづから敵を迎え撃つべく、わずかな兵を率いて南下していった。王の陣頭指揮にはむろん、将兵を奮いたたせる心理的な効果も期待されてはいたが、実は側近のなかにすら「親征軍あらざれば出陣の義務なし」と、出兵を拒む者らがいたのだった。身命を賭して王たる者の義務を果たさんとする悲壮な意気に感じ、馳せ参じる武将らもあって、最終的にはハンガリー軍兵力は二万を越えた。

ドナウ中流の湿地帯の町モハッチで、王はドラバ河を押しわたる敵の大軍に驚く。ひとまず退却し、領国クロアチア、ベーメン、メーレンの援兵、それに四万の兵を率いてくるはずのトランシルヴァニア侯ヤノーシュ・サポイヤを待とうとするが、自負と功名心だけは人一倍強いハンガリー武将らの血気に押しきられた恰好で、ラヨシュは無謀な戦に突入してしまう。近侍が兜を差出した

時、事の成行に仰天したのか、王の顔は蒼白だった。

一〇倍は遙かに越える大帝の軍団に対し、城塞に立てこもるでもなく、山岳戦に持ちこむでもなく、ただ広い平原で真正面から決戦を挑むという初歩的なミスに加えて、ハンガリー軍は相手の巧妙な誘導作戦に迂濶にも乗ってしまう。血気にはやる騎馬隊は、王の突撃命令をまぢかねたように、敵陣めがけて文字通り猪突猛進。相手側の騎兵は、この勢いに押された恰好で後退。ラヨシュ軍優勢のうちに、戦いの火ぶたが切っておとされたように見えた。だがトルコ軍前衛部隊は勢いによって追撃してくる敵兵を、大砲とイエニチェリ軍団で固めた本隊の方へとおびき寄せていったのだった。突如、ハンガリーの騎馬武者らの前方に、大砲陣地があらわれる。次の瞬間、づらりと並んだ砲門が一斉に火をふいた。悲鳴があらがり、人馬がふっとび、一瞬にしてハンガリー軍は総崩れ。砲撃がやんだと思うや、今度は半月刀を振りかざしたイエニチェリ軍団が、阿修羅の如く襲いかかっていっ

た。戦闘は午後三時に始まり、一時間半の後には、篠つく雨の中、ハンガリー軍壊滅ですべてが終っていた。

ラヨシュは惨劇の現場からのがれたものの、敗走の途中溺死という悲運にみまわれる。敵の大砲とイエニチェリの出現に形勢が急転したとき、いつの間にか王の姿はかき消えていた。臆病風に吹かれて逐電した形跡もかなり強いが、ともかく敗残の王は二名の騎士に守られ、ドナウ川流域の沼沢地帯に馬をのりいれていた。疲れ切っていた王の馬は、とある河を渡ろうとして泥に足をとられ横転、ラヨシュを下敷にしてしまう。完全武装で身動きもままならず、救けようとした従者一名を道づれに、王は泥沼の中にずるずると引きずり込まれていったのだった。

ラヨシュの非命に、ヤゲロ家のボヘミア、ハンガリー両王国の支配が終る。モハッチの会戦ののち、ハプスブルク家は決定的に聖ヴェンツェル、聖イシュトバーンの王冠へと近づいたのだった。その昔神聖ローマ皇帝マク

シミリアン一世と青年王の父親との間で結ばれた相続協定が、両王家の濃密な姻戚関係という事実で補完されながら浮上してくる。一四九一年、両家の間にはウラーズロー王に男系の世継ぎ無き場合、ハンガリー王国の継承権はハプスブルク家にうつるとの協定がなされ、同時に王の一人娘アンナを皇帝の孫カール、もしくはフェルディナントに娶せるといった結婚契約も成立していた。さらにその後ハンガリー王に男子が誕生したとき、両者はこの未熟児のラヨシュと、これまたまだ乳呑児の皇孫マリアとを組み合わせ、二重三重の連携網をめぐらしたのであった。

ハプスブルク家のハンガリー吸収合併という歴史の経過からすれば、ヤゲロ家はマクシミリアンの家領獲得政策の餌食になったわけであるが、契約時にあっては双方五分と五分の取り引きだったともいえよう。何故なら、当時の状況では男系消滅、家門断絶の危険など、いづれの王家にも共通していたし、カール、フェルディナント

といったふたつの持ち駒を手にしているマクシミリアンが多少有利だったとはいえ、これとても絶対的なものではない。男系なき場合の条項は、民族主義を奉じる者達にとっては許すべからざる背信行為、しかし王個人としては、相手に名を取らせ、自分は実を取ったという思いが強かったろう。事実、ハンガリー王は晩年に嗣子を得て、当面この問題を白紙還元できたうえに、同国議会はヤゲロ家断絶の暁には民族王をいただくとの決議をしていたから、ウラーズローにとって帝室との結びつき、皇帝の後ろ楯はお家安泰の御墨付きを手に入れたようなものの、むしろ、将来の不確実な可能性にかけたマクシミリアンの方が分は少なかったといえよう。カール豪胆公の娘から豊穡なブルグントとネーデルランドを、息子フィリップ美王とスペイン王女との結婚でイベリア半島の地をハプスブルク家にもたらしたマクシミリアンではあったが、はたしてハンガリー、ボヘミアの相続といった僥幸に恵まれるかどうかは、全くの未知数、この時点では

未来への不確かな可能性に対する不確かな布石以上の何ものでもなかったのである。

西暦一五一五年、ヴィーンは聖シュテファンの寺院で豪華にして奇妙な結婚式が行われた。これまで再三にわたり契約の確認と保証とを交し合ってきた両王家が、ここに一大デモンストレーションを企画し、その決意のほどを天下に誇示しつつ、協約を厳肅な事実として突きつけたのであった。孫娘マリアの手をひいた皇帝マクシミリアンと、息子ラヨシュと娘アンナを伴ったハンガリー国王は、介添役のポーランド王、グラン大司教ら両国の重臣達が見守るなか、二組の華燭の大典を演出する。ハンガリー王子は九歳ながらも、「汝をわが正当な妻として受け入れる」と宣誓し、ひとつ年上の花嫁もこれに答えた。もちろん実際の夫婦の契りは、六年先にもちこされたが。もうひとつの組には花嫁はいたが花婿の姿はみえず、それも候補は二人という当時としても変則的なもの。カール、フェルディナント、どちらの孫を使ったら

よいか思案にくれたハプスブルク家窮余の策であった。しかも結婚契約には、もし両皇孫ともにアンナとの結婚を履行しなかった場合、目下二番目の妃をなくし、やもめ暮しのマクシミリアンその人が王女を娶るとの但し書きすら付けられるという念の入れよう。この後二人の童女はともにマクシミリアンのもとで養育され、その後マリアはハンガリー王家に輿入れ、アンナの方はオーストリア大公フェルディナントの妃となった。

ハンガリー王妃マリアは夫ラヨシュ王の悲報を受けるや、ただちにブタの宮殿を離れ、オーストリアの兄のもとに身を寄せる。まだ子宝に恵まれていなかった元王妃は、民族派の貴族に擁されてハンガリー王位についたヤノーシュ・サポイヤを、モハッチの野に現われなかった裏切り者として弾劾しながら、兄のハンガリー継承闘争を応援する。当初旗色の悪かったフェルディナントだったが、諸権安堵の懐柔策とトルコよりはハプスブルク傘下を望む貴族らの動静を読んで優位に立ち、ヤノーシュ

軍を追いちらす。守勢に立たされたトランシルヴァニア公は、シュレイマーン大帝の轡くつわをとり、対フェルディナント戦への支援を要請。ここにオスマン軍団は、三年前の惨劇のあとも生々しく、人馬の白骨が無数に散乱するモハッチの平野を再び通過し、ヴィーンの市壁まで押し寄せたのである。

不首尾に終わったヴィーン遠征のあと、大帝はブタ攻略の直後ハンガリー王に擁立したサポイヤの臣従で満足し、本国へ引き揚げていったから、ハンガリーの地ではこの後もフェルディナント大公とトランシルヴァニア侯とのせめぎ合いが続く。両者の間には、サポイヤの死後王位はハプスブルク家という和議が成立したが、臨終間際に世継ぎを得たハンガリー王は、我が子可愛さの余り、一方的に協定を破棄。嬰兒シグモントをかかえた王妃は、大公の攻勢にトルコに庇護を求め、トランシルヴァニア安堵と引き換えに、王城の地ブタを明け渡す。西暦一五四一年の出来事であった。

かくして東方の帝国は、ブタに大物総督を乗り込ませる。宮殿はトルコ風に改装され、宮廷教会はモスクとなり、ドナウの岸边には豪華な浴場が湯けむりをあげ、異教文化の香りがハンガリーの一角に妖しく漂う。かつてのハンガリー王国は西部のハプスブルク領、中央部のトルコ直轄領、そしてトルコ宗主権下のトランシルヴァニア侯領とに分裂し、この政治地図は第二次ヴィーン攻防戦後、ハプスブルク家が攻勢に転じるまで、一五〇有余年にわたって塗りかえられない。

シュレイマーン大帝亡き後、低迷期にはいったトルコ帝国の国内事情に、三分割のまま、ハンガリー問題は小康状態を保つが、名門キョプリュルヤ家が代々宰相職を拝命し、国政改革を成功させた十七世紀中葉、またオスマン軍団の動きが活発化する。スルターン・メフメト四世の治世下、大宰相メフメト・キョプリュルヤ（在位一六五六―六一）は、海洋国ヴェネチアに挑戦し、二十四年間にわたるクレタ島攻略を開始。息子アフメット・キ

ョプリュルヤの大宰相時代、六三年にはハンガリー、及び現在のチェコスロバキアのドナウ流域の町ノイホイゼルまで侵寇、つづく翌六四年にはハプスブルク領ハンガリーからオーストリアまで迫ろうとした。だがこの時トルコ軍は、モンテクキュリイ伯に率いられたオーストリア・ハンガリー軍にラープ河畔、ザンクト・ゴットハルトで大敗を喫してしまう。

大戦果にもかかわらず、フランスとの系争で後背の安全を確保したいと焦るレオポルト帝は、ヴァシユバルでただちに講和に応じる。旧領の回復どころか、貢納金すら支払うというヴィーン宮廷の大巾な譲歩は、ハンガリーを犠牲にしたものと受け取られ、従来ハプスブルク派であった者達すら、ヴィーン宮廷に背を向け始めた。伝来の民族主義が再び火を吹き、ハプスブルク領ハンガリーやクロアチアはもとより、領国シュタイエルマルクまでも、きな臭い匂いがたちこめ、ヴィーン宮殿にはひんぴんと陰謀・反乱の怪情報が持ちこまれてくる。ついに

レオポルトも容疑者らの逮捕にふみきった。フランス、トルコ、ポーランドに踊らされ、しかも仲間同志の虚々実々のかけひきに、真相がどうなっているのか当事者すらさっぱりわからぬこの一件を、特別法廷は皇帝暗殺未遂事件として処理し、主謀者格の被告人五名に処刑を宣告。ヴィーンはこのマグナートの反乱を契機に、かつてボヘミヤで味をしめた新教徒反乱後の中央集権化を、ハンガリーの地でも断行しようとしたのだった。

ところが再び作業は国政改革というより反宗教改革の貫徹、新教徒派弾圧の形で進行してしまふ。謀反人狩りにはじまる新教側貴族・僧侶の逮捕と、死刑をも含む有罪判決に加え、所領没収、国外退去といった一連の弾圧が猛威をふるう。ヴィーン宮廷の支援を得たカトリック教会は、この時とばかり武装集団を放ち、新教徒を襲わせ、その施設を破壊・占拠し、強制改宗を迫り、抵抗する僧侶をガレー船に送りこむことすら辞さない。

こうした激しい弾圧に新教派は領地をすてて、トルコ

領やトランシルヴァニアへと逃げてゆく。領地を召し上げられ、祖国を追放された者達は亡命ゲリラとなり、徒党を組んではハプスブルク領に闖入し、冥加金を取りたて、村々を掠奪し、追われればトルコ領に逃げこんでしまふ。こうしたオーストリア軍とゲリラグループとの際限のないイタチごっこの過程で、やがて国境地帯を荒しまわる無数の反政府グループは、一人の青年指導者の下に結集しはじめた。亡命貴族の息子、後のトランシルヴァニア侯、エメリヒ・テケイ（一六五七—一七〇五）である。ヴィーン政府は、自分達の集団をかつての十字軍にちなんでクルツ党と呼びながら反ハプスブルク統一戦線を作りあげた、野心家で策謀好きのテケイを無視できなくなつてゆく。神出鬼没のゲリラグループの対策に疲れはててもいたヴィーン宮廷は、局面の打開をめざして彼に接近。ハンガリー議会まで召集し、何とか妥協点を見い出そうと努力する。カトリックのやりすぎに遅ればせながら気付いたレオポルトは、信教の自由を認めよう

とするが、テケイはその昔没収された新教派貴族の所領地の反還を求めてゆずらず、交渉は決裂。トルコ、トランスシルヴァニア侯ミカエル・アポヒ（一六三二—一六九〇）の支援をうけたテケイ軍は、上ハンガリーの主要都市を占領し、トルコ宮廷はこの青年を「ハンガリー王子」と呼ぶようになる。

ハンガリーの地に、またもや反ハプスブルク勢力が勢力を増しつつあったころ、メフメト四世は、アフメットの後任にカラ・ムスタファを登用した。この大宰相はキョプリュリュ家の者ではなかったが、アフメットと共に育てられ、スルターンの身内の者を妃としていた。幼い頃亡くなった父親は、アナトリアの地方豪族だったとも、いや帝都で野菜を売り歩いていたしがない行商人だったとも、ヨーロッパ外交筋はうるさい。

史家は教養もあり、寛大で大人の器量を備えていた前任者にくらべ、カラ・ムスタファを学識も低く冷酷な野心家、その本領とするところはたかだかイスラム戦士と

しての大胆不敵な行動力だったと厳しい評価を下す。そのうえ、この大宰相について後世が口にするのは、その貪婪な性向である。ヴィーン攻略の発想には無論、シュレイマーン大帝の前にも屈しなかった傲岸不遜の邪宗の町という意味もさることながら、それ以上に「黄金のリング」なるヴィーンに食指を動かしたのだというわけ。

クレタ島をめぐる長い消耗戦で国庫は疲弊し、それにスルターンの興心を買うには、なによりも高価な贈物という政治風土だったから、大宰相の旺盛な権勢欲と貪婪な品性が獲物を求めてうずいたとしても無理からぬところだろう。

クレタ島のカンジア要塞はようやく開城し、ロシアとの抗争もひと休み、ハンガリーでは、反ハプスブルクの気運が盛り上がり、フランスとはますますの関係というわけで、ヴィーン遠征の野望がそぞろ頭をもたげてる。時あたかもヴァシユバルの和から二〇年、約束の休戦期間も過ぎさるうとしていた。ルイ十四世によってシュ



進軍中のトルコ軍団

トラーズブルクを占領されたレオポルト帝は、トルコの不気味な動きをなんとか外交交渉で封じようと、貢納金増額をほめかきつつ、休戦期間の延長に持ちこもうとするが相手側は乗ってこず、ついにメフメト四世の軍勢は西に向かって動きだしてしまう。大軍団の移動を目のあたりにして息をのむオーストリア使節に、スルターンはベオグラードで狩をされるのだと、木で鼻をくくるような説明。出国を差し止められスルターンとの同行を命ぜられた特命大使らは、ただちにヴェネチア経由の秘密連絡網でヴィーンにこの情報を伝えた。したがってヴィーン宮廷はすでに一年前からオスマン軍の動静には神経を使い、半年前には、トルコ軍の鋒先が自国に向けられているらしいとの報告を受けとっていたのである。しかし、ヴィーンは東部方面に関し、最後まで楽観的な見方をすて切れず、むしろ恐るべき敵は西部にありと踏んでいた。

トルコ軍の戦時編成は、イエニチェリやスパーヒなど

の中央常備軍と、軍事封建制の統治形態から召集される
 膨大な地方軍団とでなされたから、遠征軍は道々、各地
 から集まる部隊を呑み込んで、膨れあがってゆく。ベオ
 グラードでスルターンから総大将に任じられたカラ・ム
 スタファアがハンガリーに入るや、テケイが馳せ参じ、ブ
 タからは総督イブライムが、さらにヴィーンの大宰相の
 幕屋に参内し、ムスタファアの服にうやうやしく口づけを
 したのは、トランシルヴァニア侯である。

当初、中部ハンガリーで敵をとらえ、局地戦規模で終
 息をはかろうと考えていたヴィーン宮廷も、カラ・ムス
 タファアの勢いに、防衛線をラープ川まで後退させ、ラー
 プ、シャルバール、ケルメントの城砦で敵軍の侵攻を
 くいとめようとの戦術転換。ハンガリー王戴冠式の聖
 地、シュトゥールバイセンブルクの町でもたれた軍評定
 の場で、大宰相カラ・ムスタファアは初めて今回の目的
 がヴィーンであることを示し、まずラープ城砦を落とす
 べく、ブタ総督軍を差し向け、同時にクリミヤ・タター

ル五万騎をラープ川沿いに大きく迂回させる。タター
 騎兵はケルメントの近くで難なく河を渡り、ノイジード
 ラー湖の東岸から、下オーストリアの地を馬蹄で踏み
 じった。シャルバール、ケルメント方面の防備をまか
 されていたハンガリー系司令官らは、すでにテケイと内
 通していたのだった。ヴィーン宮廷都落ちの発端となっ
 た七月七日の戦闘は、このライタ河畔に達したタター
 部隊との間におこったものである。

地方軍団のなかでも、特にジンギス汗の血をひくクリ
 ミヤ・タタール族は、途方もない爪痕を各地に残す。か
 れらは機動性を買われ、本隊が敵の要塞や主要な都市を
 攻撃する際に先兵役をつとめ、遊撃隊となって敵領地深
 く侵入。遊牧民の騎馬集団だったから、疾風のように
 やって来ては、食料や家畜を強奪し、住民を惨殺・拉致
 し、あげくのはては村々に火を放つ。一本一草も残さぬ
 ような根こそぎの掠奪行である。たまたま攻防戦が長び
 こうものなら、この掠奪部隊のまいた種が、遠征軍全体

に降りかかってくる。焦土と化した村や町には収奪しようにも食料はなく、乾し草などもきれいに灰となつてい
るのだから、軍馬の飼料にも事欠く始末。オーストリア
各地の小さな町や村では、十五世紀にしばしばくり返さ
れたトルコの侵入に、教会や市場が避難所となるよう防
備態勢を整えてもいたが、今回のタタール軍侵攻は大規
模であり、その進攻の速度に情報も追いつかず、被害は
ブルゲンラント、ヴィーン盆地、ヴィーナー・ヴァルト
山系西部地域までも及ぶ。

このタタール部隊に、テケイ側のハンガリー騎馬隊も
混じっていたが、この将兵たちの狂暴さは、決して前者
にひけをとらないものだったと伝えられる。カトリック
教会に対する憎悪のあまり、かれら新教派は祭壇を破壊
し、マリア像をひきずりおろし、墓をあばき、しかも住
民が避難していた教会堂に火をかけるなどの狂行に走っ
た。抵抗した住民は斬り殺され、降服した場合でも、ポ
ーデルスドルフの惨劇のように皆殺しの運命が待ちかま

えていた。ハンガリーでの弾圧に対する報復戦という様
相を呈したのである。

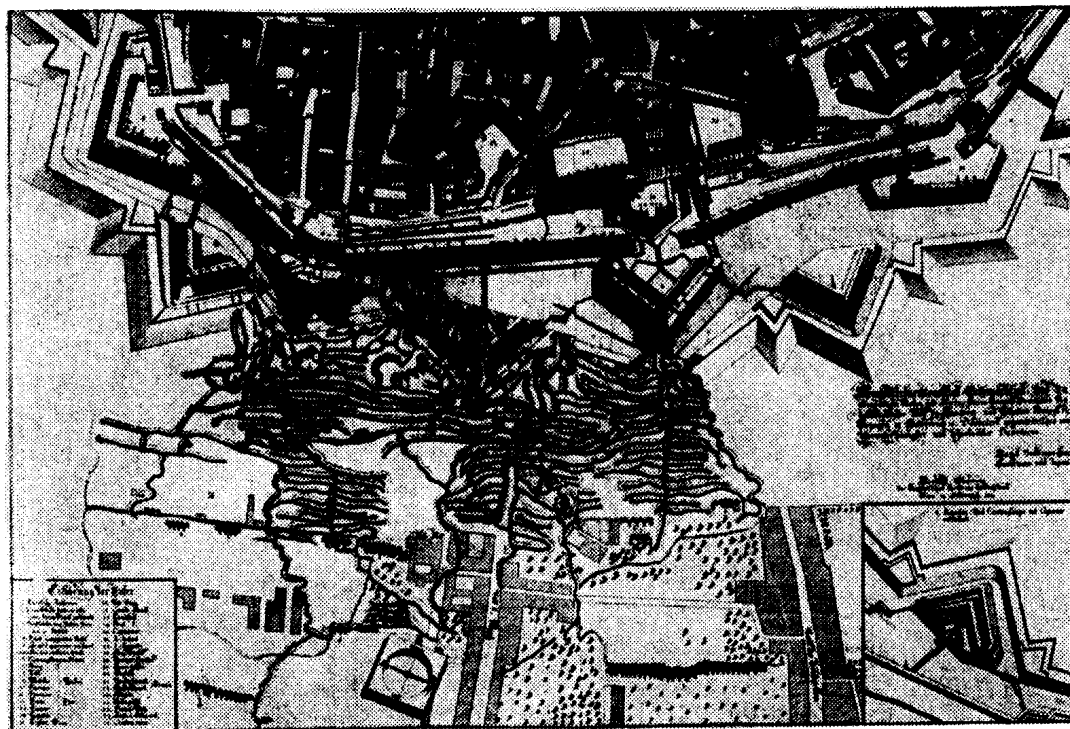
かつてシュレイマーン大帝の軍には、オーストリアの
守備隊が対岸に逃げだしてくれたのを幸いに、市門をい
ち早く明けはなったハインブルクではあったが、カラ・
ムスタファに抵抗の姿勢を示したのがいけなかった。七
月十一日、イエニチェリ軍団は市壁に殺到し、中世以来
騎士や旅人を容易に通さなかったヴィーン門も役に立た
ず、一日にして死の町に変わりはてる。ドナウを血の流
れに変えたというハインブルクの犠牲者数は、市当局と
教会の記録から正確に八四三一名とはじき出され、奴隸
としても拉致されず町にとどまれた者はたったの八名。
比較的堅固な市壁を誇るハインブルクも、敵本隊の前に
はひとたまりもなく、さしたる防御設備もなかった町な
どはタタール分遣隊にすら抵抗できない。しかし連中は
なにぶんとも弓・矢・槍・刀だけの軽装備の掠奪部隊、
ヴィーナー・ノイシュタット、クロスター・ノイブルク

などいくつかの主要な都市は陥落しなかった。またオーデンプルク、アイゼンシュタットなどの町は、テケイの前に膝を屈し、破壊をまぬがれる。しかし法外な冥加金と物資供出を命ぜられた。

カラ・ムスタファの大軍団が、しぶとい抵抗を示すラプの砦に見切りをつけ、一直線にヴィーンに向かって進撃を開始したところ、町では籠城戦にそなえて最後の作業が進んでいた。皇帝が立ち去った時、宮廷の金庫には、たったの四万グルデンの金があっただけで、これはヴィーン要塞に立籠る傭兵の給料一か月分にすぎない。ヴィーナー・ノイシュタットからわざわざヴィーンに乗りこみ、高位聖職者がすべて逃げだした後も、この町に踏みとどまった硬骨漢の、ヴィーナー・ノイシュタット司教コロニチュはグラン大司教がヴィーンに避難させてあった財産を、顕示台に至るまで独断で差し押さえ、軍資金にまわしてしまう。五〇万グルデンの巨額だった。改宗に応じない新教派の同僚をガレー船の鎖につなぐよ

うな人物であったから、実にやるのが大胆かつすさまじい。しかも包囲戦の間、負傷者や病人の世話を一手にひきうけるという怪僧である。市長以下市参事会員ら町に踏みとどまった者たちは、皇室都落ちの翌七月八日、皇帝よりヴィーン軍司令官に起用されたエルンスト・リューディガー・シュタルヘムベルク伯を迎える。伯は以前市警備団・ガウディアの長をつとめた人物で、レオポルト帝のヒット人事のひとつであろうか。またこの日、オーストリア軍司令官カール・フォン・ロートリンゲン公の騎馬隊が町に到着してくれる。官民一体となって、貯木場の整理、矢来の構築、稜堡の補強など、町をとりまく防衛線の強化のため突貫工事が開始された。

一五二九年、シュレイマーン大帝が、もと来た道を引き返していった後、ヴィーンの町は、己れの置かれた政治地理学的座標を改めて認識させられる。市当局もハプスブルク家も、この時の試練と僥幸を契機に、町の要塞化を押し進めたのだった。まず市壁部分の改造が開始さ



第二次ウィーン攻防戦 トルコ軍攻撃図

れ、その後主にイタリアの技術を導入しながら、町の外郭に各種の防備施設が配されていく。市壁にかわるべきものとして、厚さ二〇メートルから三〇メートルの、しかも垂直ではなく傾斜面をみせる幕壁（クルティイーネ）が町を囲む。また望楼はすべて姿を消し、クルティイーネからV字型に突出した稜堡（バスタイ）が三百メートル間隔で配置された。中世と近世の城郭都市の相違を示すクルティイーネとバスタイ、またその傾斜した壁面は対砲撃用の工夫で、砲弾の衝撃をやわらげ、クルティイーネへ接近する敵には、バスタイからの銃撃で応戦する陣立である。その頃銃の射程距離は高々一五〇メートル程度、したがって三百メートル間隔のバスタイから狭みこめばくまなくこの地帯を覆いつくすことが出来るという計算だろう。

クルティイーネとバスタイは位置的にも機能的にも旧市壁に相当し、この外側には昔ながらにグラীবンと呼ばれる環濠部分が残される。もっとも、第一次ウィーン攻

防戦のとき、グラীবンはすでに堀の機能をはたしては
 いなかったが、新しい計画でも水城としての能力は重視
 されなかった模様で、部分的に湿地帯が広がるというた
 程度である。このグラীবンのなかには、いわば要塞島
 ともいうべき半月堡（ラブレ）が築かれていた。ラブ
 レの位置は隣り合うバスタイの中央前方にあって、ク
 ルティーンへの直接攻撃を不可能にしようというものだ
 った。またクルティーンネの壁面に口をあけていた市門の
 うちショテン、ケルンテン、ザルツ門から郊外に延びる
 街道は、二重の検門を受けるかたちで、いったんこの前
 線基地に突きあたった後、ようやくそれぞれの方向へと
 向い始める。

グラীবンの外縁は、バスタイとラブレとの突出に
 応じた凹凸をみせるコンターエスカルペで木柵がめぐら
 されている。ここから先は幅二五〇メートル、所によつ
 ては四百メートルものガラスが広がり、郭外市の町並み
 はようやくその空地の向うから始まっていた。あのシユ

レイマーン大帝との包囲戦に際し、炎上した郊外地区の
 軍事的応用である。大砲の性能は四百メートルから六百
 メートル。一本の木の遮蔽物もない、この見通しのきく
 地帯にふみこんだ敵勢は、城壁からの砲火にさらされる
 ことになる。尚、主要なバスタイの後方にはカバリーア
 と呼ばれる瞰壘が築かれ、更に一段と高い位置から、砲
 門が前方ガラス地帯を俯瞰できるようにもなっていた。

こうした堅固な要塞都市の姿を、ヴィーンは一九世紀
 中頃まで残すことになるのだが、第二次ヴィーン攻防戦
 には部分的に未完成の個所もあったものの、ほぼその改
 造を終わっていた。したがって正攻法ということになれ
 ば、トルコ軍はまずガラスに踏みこみ、コンターエスカ
 ルペを突破し、ラブレを制圧し、バスタイを破壊し、
 クルティーンネにとりつき、市内突入といった手順を踏ま
 ざるを得ない。事実、トルコ軍団は六十二日間にわた
 り、この順序でヴィーンの武装解除を押し進めてゆく。



七月十三日早朝、まるで迫りくる災禍を先取りしたかのように、郊外の町並みが赤い炎につつまれる。第一次ヴィーン攻防戦の時と同様、郭外市に火がかけられたのだ。ロートリンゲン公は、騎兵軍団を、狭い市中からドナウ左岸に移動させ始め、ヴィーンの町を対岸で見守りながら、プレスブルクに進出してきたテケイ軍を牽制し、ポーランドからくるはずのソビエツキの軍隊を待つ戦術をとった。この日ラープから行軍してきた最後の歩兵部隊が町にたどり着き、ついにヴィーンの市門は固く閉ざされる。ヴィーン防衛軍の兵力は、オーストリア正規軍、市民軍、志願兵をあわせ、総勢一万六千名であった。

敵軍は進撃路に沿って点在する町や村をことごとく破壊しながら、ついにその巨大な姿を現わした。大宰相は大天幕の本営を、アウフ・デア・シュメルツに設営さ

せ、馬の毛を長く垂した権標が五棹、豪華な本陣入口にひるがえった。カラ・ムスタファは攻撃目標地点を、王宮に面したブルク・バスタイとレーブル・バスタイに定め、ここに主力を投入しようとする。この地帯が彼らの得意とする坑道作戦に向いていたのである。ブルク・バスタイの右手、ケルントナー・バスタイあたりからは、ヴィーン川の伏流水が懸念されたし、またレーブル・バスタイから左側の地帯はドナウ川による湿地帯だったらしい。

七月十六日、トルコ軍はヴィーン包囲網の口をしめるべく、ドナウ川の中洲に広がる町・レオポルトシュタットにも進出し、島を焼きはらう。ロートリンゲン公の小部隊もここに残っていたが、島の放棄は予定内のことであったから、本格的に敵と応戦せず、ドナウ北岸へ橋を焼き払って退却し、ヴィーンもローテントウム門からレオポルトシュタットに続くドナウ橋を破壊した。ピッチを塗りたくられた橋脚は、ブスブスといつまでも燃え

つづけた。トルコ軍はこれに対し、さっそくレオポルトシュタットの両端に橋を掛け、この中洲を完全に掌握するとともに、ヴィーンへの補給路を遮断してしまふ。

レオポルトシュタットが燃えていた十六日、ヴィーン軍司令官は、ブルク・バスタイの近くに建っていた巨大な木造建築物をとりこわさせる。これはヴィーンにおける最初の本格的なオペラハウスで、みずから作曲も手がけたほど歴代のハプスブルク家当主の中でもずばぬけて音楽的才能があつたレオポルト一世が、演出家兼建築家のイタリア人ロドヴィーコ・ブルナチーニに作らせたバロック式劇場。四層もの檜敷をもち、現代の劇場とさしてかわらぬ構造をみせていた。ただ奇妙な相異点は、一階平土間席の前方中央に、皇帝用の観覧席が一段高い台座のうえに設けられていて、さぞかし後方の客は舞台が見えずに困つたろうと思われるのだが、いやバロック時代にあつては、皇帝のお出ましこそ豪華絢爛たる舞台そのものの、待従に長柄のウチワをあおがせて観劇する皇帝

の一举一動は、舞台の進行より興味をそそる出し物であつたろう。レオポルトがこのオペラハウスの建築を思い立ったのは、姪のスペイン王女マルガリータ・テレサとの婚儀に際して、祝典劇を上演したかったのである。ハプスブルク家はレオポルトの兄フェルディナント四世の妃として、スペイン国王フェリペ四世の娘、長女マリア・テレサを所望した事があつたが、ルイ十四世との争奪戦に敗れてしまふ。レオポルトの妃となつたのはこの妹の方で、ヴェラスケス描くところの、様々に衣裳を取りかえて立ち現われる王女こそ、このマルガリータである。ハプスブルク家が長女マリアをブルボン家に渡してしまつたという失策は、やがてレオポルトの身にスペイン継承戦争となつて降りかかってくる。それはともかく、壮大な舞台を好むバロック君主の趣味を反映し、この劇場で催された祝典劇には、六十五回もの場面の入れ替えがあり、長期にわたつて宮廷人のみならず、ヴィーン市民にも見物が許されたという。

宮殿わき、しかもブルク・バスタイ、ブルク・カバリ
ーアの裏手に建っていたこの巨大木造建築物は、トルコ
軍の砲撃によって炎上する危険があった。異教徒軍が姿
を現わし始めた十四日、郊外からの飛び火か、内部失火
か、それともスパイの仕業だったのか、シヨテン教会の
建物のひとつから火災が発生し、近くの火薬庫に引火し
そうな勢い。何とか消し止めたものの司令本部はこれに
懲り、市中のこけらぶきの屋根をはがさせるほどであっ
たから、いたし方ない処置だったろう。

攻略目標地点のブルク・バルタイ、レーブル・バルタ
イの前方、グラスを望む段丘に、大砲陣地を築き、砲撃
を開始したトルコ軍だったが、ウルバンの巨砲をひきま
ずってこなかったから、砲撃効果はさしてあがらない。そ
こで大宰相は、クレタ島カンジア要塞で、威力を発揮し
た坑道作戦にうつり、塹壕を掘りすすめ市壁に迫ろうと
する。この作業には不運にもトルコ軍の捕虜となった者
たちがイエニチェリの監視下、味方の砲撃の危険にさら



第二次ヴィーン攻防戦

されながら従事。幾条もの道がうねうねと城塞に向かつてのびるとともに、横の連絡網も作られ、出撃と防戦の拠点、また武器弾薬の収蔵庫として大きな威力を発揮しはじめる。

戦いの火ふたが切られてから一週間、トルコ軍の攻撃路はコンターエスカルペに達し、七月下旬から翌月の初めにかけて、激しい攻防戦がくり広げられた。ついに、コンターエスカルペは一角を破壊され、ウィーン防衛軍の最前線が敵の手にわたってしまう。第一関門を破壊した敵軍は、さらにもぐら^ら作戦を続行し、グラীব^ンを掘り進み、レーブル・バスタイとブルク・ラブレ^ーに迫ってゆく。八月十二日、ブルク・ラブレ^ーの地下にしかけられた火薬が爆発し、敵勢がくずれ落ちた瓦礫を踏みこえて大攻勢をかけてきた。ウィーン側は、土のう、石、木柵、板切れなどで崩壊箇所を補修しながら、二時間も激戦の末、何とか敵を撃退。両軍ともおびただしい犠牲者を数えた。

地上戦とは違い、地下からの攻撃にはこれといった決め手がなく、姿の見えぬ敵に地上勤務ではベテランの将兵達の神経も苛立つ。敵はひそかに土中から城砦の土台の下にもぐりこみ、火薬樽を運びこむのだから、いつ何時足元の地面が割れ、木っ端微塵と吹き飛ばされるかわかったものではない。せいぜい地中からひびく不審な物音を聞きとり、早期に臨機応変の処置をこうじるだけである。ウィーン側は市中にいた井戸掘り人夫や鋤夫を総動員して、対坑道を掘らせ、敵の穴をつぶし、火薬を取りのぞく。また風穴を作り、爆薬の破壊力を分散させる戦術も試みられた。ブルク・ラブレ^ーは一角を大きく崩しながらも、二〇日余り敵を釘付けし、九月までも持ちこたえる。ここでは寸土を争う死闘がくり広げられ、次にラブレ^ーは残骸に近い姿となってゆく。なかなか落ちない敵の陣地に、いきりたったムスタファは見せしめのため、捕虜たちを次々とひきずり出し斬殺、ウィーン側もトルコ兵捕虜を城壁のきわに立たせて報復。夏場の

籠城戦のこと、市内には赤痢がひろがりはじめ、病人も日一日と増加していった。司令官シュタルヘムベルク伯も罹病し、担架に乗って陣頭指揮をとるといふ惨々たる有様。市長も勝利を目前にしながら、高熱に息をひきとってゆく。

九月四日、全市をゆるがす大音響と共に、ついにブルク・バスタイの前面がふつとび、一〇メートル程の亀裂にイエニチェリ軍団が突入。再び肉弾戦となったが、防衛軍側もよく応戦し、二百名に及ぶ犠牲者を出しながらも、侵入をくいとめる。翌々日九月六日、ついにレーブル・バスタイの一部もくずれ落ち、ヴィーン陥落はもはや時間の問題となってしまう。ただ頼みの綱は援軍の到来であった。

最初の総攻撃を切りぬけたものの、市内に絶望感が色濃くなりはじめた時点、司令官シュタルヘムベルクは救援軍の早期派遣を求めようと、みずから役を買って出た男に、ドナウ川対岸に待機するロートリンゲン公と連絡

をとらせた。ヴィーン攻防戦史上、名だたる歴戦の猛将たちと並び、その名を残した一介の市民、ヴィーン・カプエーの開祖と伝えられもするフランツ・コルシツキーである。トルコ語も、かの地の風習も心得ていた彼は、雨もよいの夜陰に乗じて、召使と共にショテン門から、コンターエスカルペの柵をぬけ、敵陣地に入ってゆく。

十五万の遠征軍のうち、九万程度がヴィーン包囲戦に投入されていたというが、この中にはかなりの非戦闘員もまじっていたのだった。トルコ軍宿营地は、まさしくひとつの町といった賑いを呈しており、あらゆる職種の人群れがそれぞれの生業に精を出していた。なかには包囲中の町に物資を売りこむ不屈き者まで現われ、ヴィーンの気丈夫な女房達は、トルコ兵から生鮮食料品を手に入れたとも伝えられる。したがって、いったん敵陣地に潜入し、コルシツキーのようにトルコ民謡でも口ずさんで闊歩すれば、それほどの決死行ではなかったらしい。クロスター・ノイブルクで運よく味方の舟に拾われて、

ロートリンゲン公のもとに到着した彼は、ロケット式の花火をうち上げてもらい、ヴィーンも聖シュテファンの塔上から花火でこれに答える。両名は援軍集結中の吉報を携えて町に帰還し、防衛軍を大いに奮起させた。

こうした諜報活動は盛んで、ヴィーン軍司令官も敵側と内通していた市民を、縛り首にしなればならなかったし、またトルコ軍陣営で敵と同じ釜の飯を食わされていたオーストリア大使も、外交官特権をフルに活用しながら、敵陣の情報を送ってくる。トルコ宮廷は外交儀礼には大層こだわり、また外交上のかけひきの重要さも充分認識していたから、ヴィーン大使に遠征軍随行を命じるといふ、一風変わったトルコ式国交断絶の意志表示のあとは、敵国大使に陣中での自由は保証したのである。コルシツキーの行動も敵側にもれ、更にもれたという情報ヴィーン市内にもたらされるといった奇奇怪怪の諜報合戦が繰りひろげられた。

※ ※ ※

ヴィーン救援軍は山腹を下りはじめた。レオポルトベルクとカーレンベルクの斜面を降りるのは、ロートリンゲン公麾下のオーストリア軍。中央部、フォーゲルザング、ヘルマンスコーゲルの山頂からは、マクス・エマヌエル・フォン・バイエルンとヨハン・ゲオルク・フォン・ザクセン両侯の部隊、それにヴァルデクに率いられたフランケンとシュヴァーベン兵。右翼陣を形づくるポランド軍は、ドライマルクシュタインから南東に流れる山稜を押しだして来た。カラ・ムスタファは軍団を二分し、一方では相変わらず市壁突破の作業を続行させながら、残る半分の兵力で同盟軍を迎撃しようとしていた。

ロートリンゲン公の最左翼陣がまず敵と交戦、敵勢はドナウ川沿いに山裾まで進出していたからである。竜騎兵、重甲騎兵など多くの騎馬隊をかかえ、総員二万余名というポランド軍は、比較的傾斜のゆるやかな山腹を

広い陣形をとりながら進んでいったが、思ってもみなかった伏兵に悲鳴をあげる。山麓一面に広がっていたブドウ畑である。幹の方はまだしも、厄介なのは畑にめぐらされた垣根で、茨・灌木・石垣・木柵といった障害物が際限なく立ちはだかつてくる。要所要所に築かれた敵の前哨基地をつぶし、襲いかかる敵兵を蹴散らしての前進は、予想外に手間どり、右翼陣が本格的な戦闘に突入したのは、正午をかなり廻った頃であった。

市壁内にいたさる士官の証言によれば、同盟軍は「これまで眼にしたこともないような美事な戦闘隊形」を布きながら、立ち向ってゆく敵部隊を次々と確実に撃破し、前進を続けたとされている。ロートリンゲン公の部隊は布陣時からして町に最も近く、そのうえ将兵の戦いぶりもひときわ抜んでいたから、一気に突き進めばヴィーンの市壁だったが、公は自分の部隊を苦戦する他の陣営に割くなど、常に全線にわたる配慮を忘れなかった。

一方、カーレンベルク山頂から出陣するキリスト教軍団を、「瀝青炭」の流れと形容したのはトルコ宮廷の式部卿である。式部卿の従軍記には「邪教徒」軍団の攻撃法、イスラム軍の陣容と戦闘の推移、大宰相の大立ち回りなどがまさしく回教流の筆はこびで記され、興味つきの素材を提供してくれるのだ。

「遂に邪教の族は前面に歩兵を、後陣に騎兵を配し、暴れだしたブタの如く我が軍に向って突進し、山裾から破壊されていたヌスドルフまでも進出してきた。しばしの間、方々で戦闘がくりひろげられていたが、やがて破落戸らの集団は密集陣となり、左右両翼を突破し、イスラムの戦士に全面攻撃を挑んできた……邪教の族はますます強大となり、戦いは一段と激しさを増し、はやくも五・六時間もの時が経過していた。イスラム軍団は、敵の大砲と鉄砲の弾を雨霰と浴びせかけられた。回教徒側は遂にことごとくが失われ、破局は最早や避けうべくもないのを知った。大宰相のまわりで戦い続いていた兵の群れが、敵と応戦しながらも敗走をはじめた。逃げだした者たちの多くは、ただ命と財とを救いたいとだけ願っていた。大宰相が近習らをひきつれ、聖旗をかかげ、敵を切り伏せながら大天幕までもどって来た時、はやくも敵勢は

軍營のそこかしこに現われ、テントに迫ろうとしていた。今や、塹壕にいた部隊にも撤収命令が出された。敵軍が奉行天幕の前に押し寄せ、軍旗を宝物天幕に押し立てた時、大宰相はふたたび近習とパシヤを伴ない、邪教の族の群れに打ちかかっていった。大宰相はみずから槍を振りかざし、邪教徒の群れに突込んでいったのである。この戦闘で、かれの秘書や多くの大隊長と小姓らが傷を負い、命をも落した……大宰相は豪胆にして、一步たりとも退こうとしなかった。かれはこの日を生きのびるより、むしろ破滅を望み、戦いのうちに死を求めようと決意していたのだ。しかしイスラムの朋輩の身と聖旗への配慮とから、オスマンとスパークの大隊長が大宰相に懇願した。△殿、御慈悲でございます。ことごとくが失われてしまいました。だが、殿のお命は我が軍の魂、殿がお命を捨てるようなことになれば、イスラムの軍は壊滅してしまいます。どうかここをお離れ下さいませ、こういうと大隊長は聖旗をつかんだ。他の従臣たちもラープへの退却を切に願ったので、大宰相は日没の一時半前、大天幕を裏門から後にした」

「暴れだしたブタの如く」襲いかかってくるキリスト教同盟軍によって、徐々に退却を余儀なくされたトルコ軍団は、遂に大きく崩れはじめ。まずブタ総督の右陣が

破られ、戦列を乱して敗走を開始。つづいてダマスカス総督の左翼陣も突破されてしまう。カラ・ムスタファアの中央陣は最後まで奮戦したが、もはや浮き足だった陣営の立直しはきかない。奇妙なことに、塹壕のなかでは相変わらず、多くの将兵が町への攻撃を続行している。半分の兵を割いただけの大宰相の作戦は、明らかに失敗だった。

かのタタール軍は早々に敗け戦の臭いを嗅ぎつけたのか、一部の騎馬隊を除いては、まったく戦闘に加わりもしない。この遊牧民を信頼していなかった総大将は、その驕慢な気性も手伝ってか、馬の腐肉を喰う族とかれらを蔑んでいたと伝えられ、最後の土壇場で致命的な報復を受けてしまったのだ。

またハンガリー地区担当のテケイは、ロートリンゲン公の部隊にプレスブルクから追い払われた後は、さしたる動きも見せず、ヴィーン攻防戦の成行を窺うだけの狡猾さを示す。

同盟軍側の大勝利は、その完璧な共同歩調もさることながら、敵側陣営に蔓延しはじめていた厭戦気分によるところも大きい。異教徒征伐の聖戦意識が大きな比重を占めているオスマン軍団にあっては、将兵の志気はいったん突撃作戦が失敗したり、長期戦に持ちこまれたりすると急速に萎んでゆく。かつてシュレイマーンはこの事態に直面し、ただちに英断をふるい、事なきを得たのだった。

ヴィーンがカラ・ムスタファ軍に対して良く粘りぬいたのは紛れもない事実だが、一説によると、敵の総大将は町の降服と開城を期待し、総攻撃のチャンスを幾度か逃したのではないかとの疑惑も提出されている。総攻撃は町の掠奪を全將兵に許すものであった。したがってヴィーンをそっくり自分の物としたい強欲さ由に、大宰相は部下の戦意を引きだせず、包囲戦を長びかせ、最後の戦にも総力を結集できずに終わったと断罪されるのである。



レオポルト1世とソビエツキの会見
左から、エマヌエル・フォン・バイエルン、ヴァルデク侯、シュタルヘムベルク伯、レオポルト1世、ポーランド王子ヤコブ、ポーランド王、ザクセン選帝侯、ロートリングゲン公

総崩れを起したトルコ軍が、進軍して来た道をハンガリー方面に逃走していった後、敵の宿営地には夥しい量の物資が残されていた。塹壕内の掃討作戦が終了した頃、今まで余りの物量に手を出しかねウロウロしていたポーランド兵だったが、ついに持ち前の気性を爆発させる。松明を振りかざし、眼を血走らせながら、かれらはトルコ軍宿営地を走りまわる。キリスト教軍団、少なくともドイツとオーストリア兵には掠奪禁止令が出されていた。ポーランド軍の暴走である。しかし暴走といった表現は少々的是れかもしれない。なにぶん、かれらの流儀では勝者が敗者を身ぐるみ剥ぐのも当然の権利。豪華にして華美な出立の騎士はさておき、満身に軍服すら着ていないポーランドの歩兵にとっては、掠奪こそ生きるための手段。かれらこそ敵の服を奪うまで退りぞくことを知らないと評される勇敢な連中、いや正確には、恐るべき餓鬼の集団だったのである。

かれらの頭目ソビエツキすら勝軍の大将として、敵將

の遺産を自分の物にしてしまう。懐中にわずかの品を握りこんだだけで敗走していったカラ・ムスタファの御座所には美事な武具、高価な什器、貴金属、軍資金、それに幾頭もの駿馬も残されていた。広大なトルコ軍宿営地には、牛・馬・ラクダ・ラバ・ヒツジなど本国から連れてきたものや、遠征途中に徴発・収奪した動物がウヨウヨしており、特にヒツジなどは一万頭にもものぼったという。大砲三百門をはじめとして、武器・弾薬などの軍需物資も、ヴィーン解放の現場に居合わせた士官の評価によれば、百万グルデンの巨額である。

ポーランド兵の狼藉に、他の軍団もじっとしてはいられない。またたく間に全軍団が獲物を求めて、トルコ軍テントに殺到した。一足遅れてしまったものの、ヴィーン市民も市門から飛びだし、おこぼれを拾いに奔走、それでもまだかなりの収穫があったらしい。敵が置いていったものはただ物資だけにとどまらない。退却の指令と同時に、手足まといになりそうな捕虜の処刑命令も下さ

れていたから、分捕り物を求めて狂奔する兵たちの足元には、死体が転がり、しかもあたり一面はものすごい臭気。かの辣腕家司教コロニチュは五百を越える子供らを拾い集め、保護する。郊外の町の地下蔵には、かなりの量の酒樽が無傷のまま残っていて、将兵たちはこれにも群がった。

第二次ヴィーン攻防戦でトルコ側が蒙った人的被害は死者五万及至六万、うちカーレンベルクの決戦によるものは一万から二万、一方ヴィーン防衛軍は約半数の七千名を失ない、救援軍は千五百名程度だったと推定されている。

※ ※ ※

ヴィーン奪還を旗印に良くまとまった行動を見せてきた同盟軍も、目的を達するや急速に瓦解しはじめる。めぼしい戦利品をこっそり奪ってしまったポーランド軍へ

の反撥は大きく、ソビエツキの誇らしげな態度も、皇帝軍將兵には増長とうつる。追撃を主張するロートリンゲン公に対しても、王は曖昧な返事をかえすだけ。敵殲滅の好機だったが、何故か王は煮えきらず、結局この謎めいた遡巡に追撃作戦は期を失ってしまう。掠奪物に飽食した部下の意向を汲んだ結果だとも、また王にしてからが、レオポルト帝に先んじてヴィーン入城の凱旋式をやりましたかったのだとされている。

翌十三日、ポーランド王は盛装した部隊を引き連れ、解放の感謝と喜びにわく町に入る。市民軍の榮譽礼と町民の大歓呼に迎えられた王は、意気揚々と町をゆき、シュテファン寺院に参拝し、アウグスティン教会でミサに出席、朗々たる声で讚美歌を唱した。

クレムスから舟で下ってきた皇帝がヴィーンに着いたのは、その翌日のことである。皇帝は凱旋式を自分の手でやりたいと指示してあったが、ポーランド王は自分ひとりではやく済ませていた。祝砲も轟き、大勢の者

たちが出迎えたが、前日のような興奮はもはやない。市内は長期の籠城戦で荒れはて、宮殿にも皇帝の寝所になりそうな部屋は見つからない。スイス宮に隣接しクルテイーネに面していたレオポルト宮はひどい有様で、帝はこの自分で造営した建物の無残な姿に涙したという。

ヴィーン解放の三日目、皇帝とポーランド王の会見がシュベヒャータの原で行われた。

キリスト教同盟軍総大将として、全欧の称賛を勝ちとった男と、敵前で尻尾をまいて逃げだした、だが身分だけは滅法高いとされる男との会見だったから、周囲はハラハラしながらも、興味深々、固唾をのんで見守っていた。双方とも馬に乗ったままで近づき、まず皇帝が帽子をあげながらラテン語で謝意を表し、王がこれに答えた。恐らくレオポルトにしてみれば、相手はたかが軍人あがりの選挙王ではないかという思いは抜きがたかったに相違ない。しかし相手はヴィーン解放の功労者それに帝国の一員ではないポーランドの首長だったから、皇帝

の方がそれなりに気を使い、万事はつつがなく収まりそうだった。

だが周囲の期待は裏切られず、次の瞬間椿事が起る。ソビエツキが皇帝に息子ヤコブを紹介したとき、ハプスブルクの当主はこの王子をまったく無視したのだった。

爾来、世人はこの事件をさまざまに詮議だててきた。皇帝は出し抜かれた戦勝式のしっぺ返しをしたのだと、レオポルトの王者らしからぬ心根を非難する者、いや皇帝たる身にして一介の王子ごとくに会釈の必要など毛頭ないと弁護にこれ努める者など百家争鳴の有様。もっとも専門家はポーランド王子とハプスブルク家皇女との縁談が持ちだされようとしていたやさき、皇帝はこれを念頭に拒絶の意志表示をしたのだと解釈しているようだ。

ポーランド王は皇帝の態度にひどく傷つけられてしまう。皇帝に腹をたてたのはひとり王だけではない。新教派のザクセン選帝侯も、ハンガリー問題でなま返事をした帝に憤り、さっさと国に引きあげてゆく。ダビアーノ

が懸念した通り、さして悪意はないのだが余りの名門ゆえの悲劇でもあろうか、宮廷儀礼・位階序列に身動きもままならぬバロック君主は、知らぬ間に周囲の者たちをいたく傷つけてしまふのだった。かくして同盟軍指揮官らはバラバラになりはじめ、ロートリンゲン公が皇帝軍と帝国軍の一部を引き連れ、ポーランド王ともどもハンガリーに向ったのは、ようやく九月十八日であった。

追撃作戦の遅れは、オスマン軍にとって貴重なものだった。わずか一日半でラープ川まで達し、トルコ領ハンガリーに逃げこんだカラ・ムスタファは、この間にある程度陣営を立て直すことができたのである。かれは残軍を狩り集め、外敵の進攻に備えるとともに、内なる敵にも防備を固めだす。つまり、大宰相はヴィーン攻略の失敗を他人に帰すべく必死の工作を開始したのだ。最初に陣を崩したブタ総督イブラヒムがまず血祭りにあげられる。しかしなにしろ、生き証人は無数にいるのだから、総督ひとりの口を封じたところで不安がおさまらうはず

もない。かくして大宰相は狂ったように部下を処刑しはじめた。また贈物を持たせた腹心の者をスルターンの宮殿に送りこむのも忘れなかった。

十月二十六日、ロートリンゲン公とソビエツキらの部隊は、長らくトルコ軍の支配下にあったグランを開城させ、一五〇年にわたるトルコ領ハンガリーの一角を切り崩す。ハプスブルク家の勝利に戦々恐々となったのは、テケイ側に走ったハンガリー貴族たち。かつてレオポルトはかれらに極刑を下したこともある。形勢不利とみるや、いくつかの砦ではハンガリー兵が突然、ともに要塞警固の任に当たっていたトルコ兵に襲いかかる。寝返り組が頼みとするは無論ポーランド王で、ソビエツキの息子に王位をと画策するが、ハプスブルク家も黙っていない。ポーランド軍は異境の地で厳しい冬を迎え、軍規は乱れはじめた。ついに王はハンガリーに見切りをつけ、十一月初旬雪のカルパチア山脈を越えてポーランドに帰っていった。

グラン陥落によって、トルコ側の旗色がいつそう悪くなりをはじめていたこの年のクリスマス、ベオグラードにいたカラ・ムスタファのもとに、都からの使者が到着する。使者はかれに宰相職剝奪の沙汰を伝え、絹の紐を差しだした。死刑宣告である。ヴィーンからの敗走以来悪あがきを続けてきた大宰相も、すでに覚悟は決めていたらしく、使者の言上を平然と聞いていた。それからアラの神に祈りを捧げた後、ガウンと被り物をぬぎ、床の絨緞を取りのぞかせ、そこに仁王立となる。彼は美事な顎鬚を高く持ちあげ、みずから首に絹紐をまきつけてから、刑吏に両端を握らせ、憤然と縊れはてたのであった。ハンガリー情勢の悪化に、カラ・ムスタファの衰運を嗅ぎつけた反対派の面々が、卑劣なやり口で殺された仲間の遺恨を晴そうと、やはり大宰相と反目していた宦官長に働きかけ、一部始終をメフメト四世の耳に入れたのだった。史家はブタ総督を処刑したのは、大宰相の短慮であったと断じる。真先に逃げだすという失態を見せ

た総督が、連座の危険を犯してまで讒言じみた奏上を為すはずはないし、またこの人物はスルターンの親しい身内であったから、我が身の為にも助命嘆願の役を買ってただらうというのである。結局、カラ・ムスタファなる人物は、確かに筋金入りのアラの戦士だったが、一国の宰相としての器量に欠けていたようだ。尚、大宰相の首級は顔皮と頭蓋骨部分とに腑分けされた後、顔皮の方はスルターンのもとに届けられ、またその頭蓋骨と称されるものは、コロニチュ司教の手を経てヴィーンに持ちこまれた。

第二次ヴィーン攻防戦の勝利は、ハプスブルク家にとっても、ヴィーンの町にとっても、まさしくひとつのエポックを画す重大事件だった。東西文化の接点という特殊な座標に組みこまれたヴィーンは、つねに強大な異民族文化に呑みこまれてしまう危険に晒されてきた。その昔、ローマ帝国は蛮族襲来の嵐のなかで、辺境の軍団基地・ヴィンドボーナを見棄てたが、こうした運命が何時

なんどき襲いかかってくるか分からなかったのである。

事実、異教徒オスマンの大軍団は、二度にわたりこの町に襲来した。しかしヴィーンは二度までもこの苛烈な試練に耐えぬく。シュレイマーン大帝との攻防戦を切りぬけた町は、ハプスブルク家王城の地としての地位を確立し、カラ・ムスタファとの戦いで、ヨーロッパの帝都としての信望と盛名を獲得したのである。

第二次ヴィーン攻防戦で盛運に恵まれたハプスブルク

家は、ドナウ中流の地からトルコ勢力を駆逐すべく、以後

大いなる攻勢に転じてゆく。このとき征討の事業を支えたのは、ヴィーン奪還に参戦した武将たちである。特に、後年トルコ軍をセントとベオグラードで撃破するという快挙を為しとげたオイゲン公は、一六八三年九月十二日の決戦に際し、ロートリンゲン公麾下の、まだ無名の一武将として、カーレンベルクの山腹を下ったのだった。

(一九八四年五月 はば たけし)

〔主要参考文献〕

- Barker, Thomas M. : Doppeladler und Halbmond, Verlag Styria, Graz, Wien, Köln, 1982
 Broucek, Peter : Historischer Atlas zur zweiten Türkenbelagerung, Franz Deuticke Verlagsgesellschaft, Wien, 1983
 Diriegl, Günter : Wien 1529, Die erste Türkenbelagerung, Hermann Böhlau Nachf., Wien, Köln, Graz, 1979
 Endler, Franz : Wien im Barock, Verlag Ueberreuter, Wien, Heidelberg, 1979
 Frass, Otto : Quellenbuch zur Österreichischen Geschichte, Birken Verlag, Wien, 1956
 Kleindel, Walter : Österreich, Daten zur Geschichte und Kultur, Verlag Ueberreuter, Wien, Heidelberg, 1978
 Perfahl, Jost : Wienchronik, Verlag Das Bergland-Buch, Salzburg, Stuttgart, 1961
 Spielman, John P. : Leopold I., Verlag Styria, Graz, Wien, Köln, 1981
 Waissenberger, Robert : Die Türken vor Wien 1683, Residenz Verlag, Salzburg, Wien, 1982
 Wandruszka, Adam : Das Haus Habsburg, Herder Verlag, Köln, 1968